

『九つの物語』に現れる 三人の特殊な人物を考えて

新田 玲子

序

サリンジャーの作品には感受性の非常に鋭い青年達や早熟な子供達が数多く登場するが、中でも『九つの物語』に現れる三人の人物、すなわち、「バナナ魚にはもってこいの日」のシーモア・グラスと、「笑い男」でゲドズツスキー青年の語る物語に登場する笑い男と、「テディ」のテディとは、特に目を引く。というのも、この三人の人並み外れた能力は、人間に可能とは思われないことまで成し遂げているように見えるからである。しかも、三人が三人とも、多かれ少なかれ死を選択している。サリンジャーの多くの登場人物は生きることの難しさを感じているが、実際に自殺する人物がほとんどいないことを考えれば、この三人に共通するような特殊能力を持てば、人間として存在できなくなると、サリンジャーは見なしているようである。

ところで、この三人に共通する特殊能力が何かということに関しては、すでに多くの批評家が議論してきている。そして、シーモア・グラスの名の比喩や、彼が木に見入っていたこと、笑い男が外見の違いという障害に妨げられずに動物達と自由に話げたこと、テディが前世と来世を見通す力があつたことなどから、この共通の能力は、ケネス・ハミルトン氏が、“to see beyond the external world of time and space.”¹ と呼んでいるもの、すなわち、物の外形にとらわれずに本質を見抜く力であることは、容易に推察できる。従ってここでは、三の人物の特殊な能力そのものについてではなく、その能力と現実世界とのかかわり方を作家がどう捉えているかという点を、主人公を取り巻く人物や、彼らと主人公との関係の在り方に注目しながら考えてみたいと思う。

シーモアの場合—鮮明な象徴と問題意識の曖昧さ

「バナナ魚にはもってこいの日」の前半は、ミュリエルと彼女の母親との電話による会話で占められている。そこでは、マニキュアやドレスのような身を飾るものや、家庭向けの性雑誌が背景を成し、母と娘の人となりを見せつける。勿論、ウォーレン・フレンチ氏が指摘しているように、耳障りな声はもっぱら母親の声であり、ミュリエルは少しも苛立っていないことは事実であるが、それは、“Muriel is a tower of coolly self-controlled strength...”² という、彼の賞賛に値するほど立派なものとは思えない。というのも、氏は、ミュリエルが電話のベルにせかさねずに冷静であることを、彼女の弁護の根拠にしているけれども、この行為を、たばこを吸うようなつまらないことのために母親の心配気な質問を中断したり、問題があると見える夫を一人で放っておいたり、自分の楽しみを理由にマイアミ滞在を続けようとしたりする、彼女の他の行為と照らして考えると、相手に対する思いやりの欠如と無思慮のなせる業と思えるからである。しかもこ

のような行為は、シーモアに関する心配事をドレスの話で中断する、母親の軽率な行為と平行しているの、母と娘は共に浅薄で無神経な人種に見えざるを得ないのである。

ミュリエルと彼女の母親に対するこの評価は、シーモアがミュリエルを“Miss Spiritual Tramp of 1948”³ と呼ぶと言われていることでも、正当化されて見えるが、浜辺の場面のシーモアは決してミュリエルに批判的ではない。彼が物語るバナナ魚の比喻でさえ、異質なのはバナナ魚の方である。

“Well, they swim into a hole where there’s a lot of bananas. They’re very ordinary-looking fish when they swim *in*. But once they get in, they behave like pigs. ...Naturally, after that they’re so fat they can’t get out of the hole again. Can’t fit through the door.”

…“What happens to them?”

…“Well, I hate to tell you, Sybil. They die.”

“Why?” asked Sybil.

“Well, they get banana fever. It’s a terrible disease.”⁴

バナナ魚は“ordinary-looking”であっても、“ordinary”ではない。そして、バナナ魚は自らの過失、つまり、バナナを好む性質を抑制できないために、バナナを食べ過ぎてバナナ熱を引き起こして死ぬのであり、破滅の決定的原因は内在的なものである。

しかも、バナナ魚の好むバナナは、セックスを示唆する黄色い色と6 (six) という数字と関連付けられており⁵、ミュリエルの存在の仕方を暗示している。従って、バナナを好むバナナ魚のシーモアは、ミュリエルの存在の仕方を好んでいたと見なされなくてはならないし、ミュリエルの生き方に対して幻滅したり、その価値を否定しようとして自殺したということはある得ない。同様に、シーモアは“*They (bananafish) lead a very tragic life.*”⁶ と、バナナ魚を悲劇的存在と見なしているの、ゲアリー・レイン氏が言うような、現世でかなえられない愛を来世で捜そうとするための自殺であり得たはずもない⁷。むしろ、バナナを好む魚であるが故に、味覚という肉体の感覚に訴えるバナナの甘い喜びに引き付けられ、青い海を泳ぐ精神的に自由な魚としての機能を失ってしまうことを考えれば、バナナ魚に死をもたらすバナナ熱とは、シーモアが最終的に選んだ本質的な存在の仕方と、ミュリエルによって代表される肉体を持って生きるものの存在の仕方との、根源的な対立から生じた摩擦熱だったと考えるのが妥当と言える。

このように、バナナ魚の比喻から帰結されるミュリエルの価値は、前半の批判的な調子とは矛盾する。ところが前半の手厳しい調子が作品の基調を作り上げてしまうので、バナナ魚の意味と前半の作者の視点とが結びつかず、ウィリアム・ウィーガンド氏が“*When the important bananafish symbol arrives later in the story, it is impossible to do much with it.*”⁸ と言ったのも無理はない。バナナ魚が物質主義の犠牲者に見えてしまう時、ミュリエルの良さもシーモアの良さも捨て難いから苦しみが生じているのだということや、シーモアの生き方には、ミュリエルの安否を気遣う母親の言葉が真実と成り得るかもしれない危険性が含まれているのだということが、十分に伝わらないのである。その結果、バナナ魚のイメージが強烈な割りには、ただ物質主義を否定している、浅薄な意味しかそこに含まれていないように見えてしまうのである。

笑い男の場合一人間の立場からの問題究明

「バナナ魚にはもってこいの日」で曖昧だった作家の主張は、「笑い男」においてはもっと明確に把握されているように思われる。この物語でミュリエルに相当する人物はメアリー・ハドソンであろう。アングロ・サクソン風の名前、ビーバーのコート、非常に美人であることなどが、彼女がミュリエル同様に、物質的、外見的に文句の無い人物であることをほのめかしている。また、キャッチャー・ミット以外は頑として受け付けず、出塁すれば必ず盗塁しないではおかない性格も、単純で愚かではあるが確固とした自我を持ったミュリエルを思わせる。しかし、語り手は、「バナナ魚にはもってこいの日」の前半でミュリエルが扱われている手厳さでメアリー・ハドソンを扱うことはしない。それどころか、彼女の逆らい難い魅力を素直に認めているのである。

Over on third base, Mary Hudson waved to me. I waved back. I couldn't have stopped myself, even if I'd wanted to. Her stickwork aside, she happened to be a girl who knew how to wave to somebody from third base.⁹

メアリー・ハドソンがバッティングのことを何も知らないというのは、少年達の世界を解しない余所者であることを暗示している。他方、三塁から手を振る魅力的な仕草は、少年達には不可能な、女性だけに与えられる喜びを彼女が持っていることの示唆である。

このように、この物語では、物質主義の見本のようなメアリー・ハドソンが必ずしも批判の対象にされていないように、コマンチクラブの少年達の結び付きや笑い男の生き方を支える、目に見えないものの良さを重んじることも、必ずしも賞賛の対象になってはいない。目に見えないものの価値を重んじることが、この世界では非常に危険になる可能性があることを語り手の少年が実感するのは、物語の終わりになってからだが、少年よりも年の多いゲドズツスキー青年は、メアリー・ハドソンが現れるずっと以前からその事実気付いていて、笑い男の異質性に危険を含ませている。

Strangers fainted dead away at the sight of the Laughing Man's horrible face.¹⁰

異質さが想像上のいれずみやバナナ熱であった時には、シーモアが加害者になりうるという義母の心配も、義母の愚かさを強調するだけにように解釈できる曖昧さを残していたが、笑い男の醜さが普通の人を気絶させるような実害をもたらす時、精神性だけを強調する生き方の危険性が明示され、それだけに傾くことへの警戒が呼び掛けられている。

ところで、アラン・ダビソン氏は、“Acceptance of responsibility involves more maturity than they have attained.”¹¹と、ゲドズツスキー青年や語り手の少年を批判している。確かに、ゲドズツスキー青年も語り手の少年も上手に世渡りして行ける種類の人間ではない。だが、彼らの結び付きは心と心とが触れ合ったものであり、作家の共感が大いに感じられるのである。それでいて、今まで述べてきたように、メアリー・ハドソンは決して批判的に扱われてはいない。そして、ゲドズツスキー青年も笑い男も、メアリー・ハドソンの価値を評価しているし、その世界に属した

いと願っていてもいる。従って問題は、笑い男の世界か、メアリー・ハドソンの世界か、という選択から生じているのではなく、二つの世界を両立させ続けることができない人間世界の限界から生じているのである。

さらに、この二つの世界はそれぞれに良いものを持っていながら、お互いを傷つけあってだめにしてしまう可能性をはらんでいる。ゲドズツスキー青年とメアリー・ハドソンとの関係に終わりがきた時、青年が語る物語の中では、探偵のデュファージュ親子は、笑い男の孤独の慰めであった「クロツバサ」を殺す。他方、殺生を嫌っていた笑い男はデュファージュ親子を殺し、自分も死を選ぶ。この場面に、ポール・カーシュナー氏は、ゲドズツスキー青年のメアリー・ハドソンに対する隠された嫌悪を読み取っているが¹²、ゲドズツスキー青年すなわち語り手の少年ではないから、青年の嫌悪を語り手の視点に代表される作家の視点と同一視してはならないことを、氏は見落としている。

メアリー・ハドソンを失なって、絶望的になっているゲドズツスキー青年が気付かないでいることを、すなわち、ゲドズツスキー青年とメアリー・ハドソンの関係が壊れたとき、メアリーもまた泣いていたことを、語り手の少年はじっと見つめている。さらに、自分の問題に盲目になった青年が、少年達の英雄を殺して彼らの心を傷つけてしまったとき、語り手の少年は家への帰り道に、“someone’s poppy-petal mask”¹³のように見えるティッシュを見て脅える。剃き出しになった誰かの顔が笑い男の素顔ならば、彼の良さを共有している少年を震え上がらせることはなかっただろう。だから、そこには笑い男の素顔よりももっと恐ろしい顔が、つまり、英雄となつてしかるべき資質が凶器になり変わり得る、複雑で難解な人間の生き様を映したゲドズツスキー青年の素顔が想像されていたに違いない。

「笑い男」は「バナナ魚にはもってこいの日」で曖昧だったバナナ熱の実態、すなわち精神と肉体の両方を持ち、本質的なものの美しさも物質的なものの喜びも分かる人間が陥る苦しみの実態に、しっかり焦点を絞っている。しかし、語り手が語る人物が物語をするという複雑な構造を取って、作品を難解にしているにもかかわらず、シーモアや笑い男のような超人的能力を持ったものとは違った、より人間的な解答を、語り手の少年が提示できるわけではない。

例えば、ゲドズツスキー青年とメアリー・ハドソンの決裂を自覚する場面で、語り手の少年がすることといえば、危なかしげに後ろ向きに歩いて行って乳母車にぶつかることではない。

I tossed my first-baseman’s mitt up in the air and tried to have it land on my head, but it fell in a mud puddle. ...I stared at her, then walked off..., taking a tangerine out of my pocket and tossing it up in the air. About midway along the third-base foul line, I turned around and started to walk backwards, looking at Mary Hudson and holding on to my tangerine. ...I couldn’t have been more certain that Mary Hudson had permanently dropped out of the Comanche lineup. It was the kind of whole certainty, however independent of the sum of its facts, that can make walking backwards more than normally hazardous, and I bumped smack into a baby carriage.¹⁴

語り手の少年がミットであつてというような離れ業を試みるのは、ミットが象徴する少年達の心の価値で、メアリー・ハドソンとゲドズツスキー青年の仲を取りなしたかったからだと思われるが、

その試みは失敗してしまう。彼がうまく受けとめられるのはみかんでしかない。しかしみかんは、後の「ズーイー」において、精神的にまいってしまっているフラニーに父親が甲斐なく申し出るものでもあるように¹⁵、この場面にも奇跡的な効果をもたらさしめない。しかも、少年は得点に結びつく三墨線を進んでいるのではなく、ファウルの線を進んでいる。だから、ゲドズツスキー青年やメアリー・ハドソン同様に、語り手の少年にも事態を制御する力がないことは明白である。さらに、サリンジャーにおいては肉体のバランスの崩れは精神のバランスの崩れをしばしば象徴しているという、ジョン・ラッセル氏の指摘や¹⁶、乳母車が結婚や家庭を象徴するという、アラン・ダビソン氏の指摘を考慮すれば¹⁷、この少年もまた、ゲドズツスキー青年とメアリー・ハドソンとの破局を引き起こした同じ問題で、傷つけたり傷つけられたりするであろうと推測される。そして、彼のこれからの一生は、良いものが確かにあったと思われる子供時代を後ろ向きに見ながら、ぎこちなく後ずさりして行くような生き方ではないかと危ぶまれるのである。

「テディ」の場合―彼岸からの問題解決の試み

それぞれの人間がそれぞれの良さを持ちながら、彼らのかかわり合いの中で不幸を産み出しているという問題に対し、人が人としての感情を持って生きるものであるという前提に立っている前二作は、解決をもたらすことができなかった。『九つの物語』の最後の物語では、この前提がくつがえされ、主人公のテディは、人間的な生への執着にとらわれないところから、問題を眺め解決を模索している。

人間的な生への執着にとらわれない視点が意味することについては、テディ自身の言葉でかなり無骨であからさまに述べられている。例えば、彼は大学院生風のニコルソンに、“…all of a sudden I saw that *she* was God and the *milk* was God.”¹⁸ と、物を識別せず、すべてあるがままに受け入れることの重要性を説く。また手帳に、“Life is a gift horse in my opinion.”¹⁹ と書き、良く“Don't look a gift horse in the mouth.”という言い回しで使用される「贈り物の馬」と人生を同一視し、人生のあら捜しをしてはいけないという考えを表明する。彼が、彼の両親に対するウォルトン教授の批判について次のように言うのも、同じ理由からである。

I think it is very tasteless of Professor Walton to criticize my parents. He wants people to be a certain way.²⁰

ウォルトン教授はミュリエルの種類の人間を否定して、総ての人間にシーモアのような種類になることを求めている。だがテディは、幸不幸、善悪、醜美の違いを感じる判断力は、人間が後天的に習得した間違った認識に基づくものであるとして、ミュリエルの種類もシーモアの種類も共に受け入れることができる、物の存在の基本的な姿を追っているのである。

このように、テディが総ての人をあるがままに受け入れようとしている一方、彼を取り巻く人々は彼を強く拒絶しているように見える。テディの父親は、テディを“inhuman”であると考えているが、その理由をテディは自分が“emotional”ではないからと説明している。

『九つの物語』に現れる三人の特殊な人物を考えて

“My mother and father don't think a person's human unless he thinks a lot of things are very sad or very annoying or very—very *unjust*, sort of. ...He thinks I'm inhuman.”²¹

この台詞で興味深いのは、テディは父親に批判的でないかもしれないが、父親の方が間違っていて自分の方が正しいということを感じて疑わないことである。だから、父親の批判や拒絶に揺らぐことはない。彼は妹のブーパーが、“I hate you! I hate everybody in this ocean!”²²と叫ぶ時にも、妹の自分に対する嫌悪を意に介さない。彼は、“My sisiter's only six, and she hasn't been a human being for very many lives, and she doesn't like me very much.”²³と事態を把握し、そういうものとして妹を受け入れる。しかし彼の態度には、力一杯感情 (emotion) をぶつけてくる妹が本当に必要としている思いやりが無く、妹の嫌悪を正当化し得るほどに冷たい。テディは自分の優越を感じているけれども、父親や妹のような人間と深くかかわって彼らを導けるだけの力はないのである。

ところで、ダン・ウェイクフィールド氏は、テディがサリンジャーの他の登場人物とは異なることを指摘して、次のように述べている。

Though many of Salinger's characters are concerned with mysticism, Teddy is the only real mystic, and his particular answer is not the answer for any other characters and does not provide an answer to Salinger's search.²⁴

実際のところ、シーモアも笑い男も尋常でない力を持ってはいても、極めて世俗的な人間社会の一員でありたいと望んでおり、そのために、彼らの孤独な状況には悲しさが伴うし、彼らの死は悲劇的である。このような感情は、テディの言う“emotional”なものでしかないが、その極めて人間的な機能によって、彼らは現実とのつながりを保っている。他方、テディは人間的な感情を持たないために、人間の問題を解決してくれるはずの、彼の宗教観や輪廻の思想も人間とかかわることができず、最終的には無意味なものとなっているのである。

結局、「テディ」は、人間の問題を越えた清明な境地を描き、そこに到達する道を提示しているかのように見えるけれども、それまでの二つの作品が越えられなかった限界を越えて、『九つの物語』全体の展望を示すような視点を展開できてはいない。ジェームズ・ミラー氏が「テディ」に関して、“Salinger was probably experimenting with rather than expressing belief...”²⁵と述べているように、これがサリンジャーの行き着いた解決であると見なすべきではないだろう。

結 論

人間の存在を総て肯定することができれば、心の平穏は得られる。しかし、現実には確かに受け入れがたい事柄が存在しているから、総てを肯定しては、現実の問題に直面し解決をつけて、この世界の一員としてかかわってゆく積極性を欠いてしまう。他方、現実を改善しようとするならば、価値判断をし、優劣を付けているわけだが、物事には常に二面があるので、正当な評価を下し得る根拠となる普遍の真理や真実を見出すことができず、より良いものを求める者は自らの

希求と疑惑との板挟みになって自滅する危険を持つ。この二つの両極が、前者は「テディ」によって、後者は「バナナ魚にはもってこいの日」と「笑い男」によって表されている。

さて、両極の生き方を試みるシーモアも笑い男もテディも、人間の能力以上の能力を持っていたわけであるから、絶望による自殺も、解脱のための自殺も、人間としては異常な行為であると考えざるを得ない。実際、『九つの物語』の他の主要な登場人物は、この両極端の間を揺れ動きながら、どこかでかい間見たすばらしい時に心を引きずられて、悲しさや苦しさに身をよじっている。つまり、人間達はせいぜい「笑い男」の語り手の少年のように、危なかしく人生を後ろ向きに歩いて行くしかないのだと、作家は考えているようなのだ。

従って、完全や真理を幻想にしてしまう人間の限界を当然と見なし、弱点や欠陥のある人間として堂々と生きて行く道を求めることは、サリンジャーには不可能なのである。このため、現実まみれて生きている者には、サリンジャーが現実にも今一步荷担していないと感じられてしまう。しかしまさにこの欠点故に、彼の作品は、物質文明の弱肉強食の世界で置き去りにされがちな優しさや暖かさを漂わせ、傷つきやすい青年達を引き付けてやまないのである。

註

- 1 Kenneth Hamilton, *J. D. Salinger* (Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1967), p. 27.
- 2 Warren French, *J. D. Salinger* (New York: Twayne, 1963), p. 81.
- 3 J.D. Salinger, "A Perfect Day for Bananafish," in *Nine Stories* (New York: Bantam Books, 1953), p. 5. 以下、本論におけるテキストの引用はすべてこの版による。
- 4 "A Perfect Day for Bananafish," pp. 15-16.
- 5 Dallas Wiebe, "Salinger's 'A Perfect Day for Bananafish,'" in *Explicator* 23 (September, 1964), item 3. 及び, Charles V. Genthe, "Six, Sex, Sick," in *Twentieth Century Literature* 10 (January, 1965), pp. 170-71.
- 6 "A Perfect Day for Bananafish," p. 15.
- 7 Gary Lane, "Seymour's Suicide Again: A New Reading of J. D. Salinger's 'A Perfect Day for Bananafish,'" in *Studies in Short Fiction* 10 (Winter, 1973), pp. 27-33.
- 8 William Wiegand, "J.D. Salinger: Seventy-Eight Bananas," in *Salinger*, ed. Henry Anatole Grunwald (London: Peter Owen, 1964), p. 127.
- 9 J.D. Salinger, "The Laughing Man," in *Nine Stories*, p. 66.
- 10 "The Laughing Man," p. 59.
- 11 Allan Davison, "Salinger Criticism and 'The Laughing Man,'" in *Studies in Short Fiction* 18 (Winter, 1981), pp. 9-11.
- 12 Paul Kirschner, "Salinger and His Society: The Pattern of Nine Stories," in *Literary Half-Yearly*, Vol. 12 (July, 1971), p. 59.
- 13 "The Laughing Man," p. 73.
- 14 "The Laughing Man," p. 70.
- 15 J. D. Salinger, *Franny and Zooey* (New York: Bantam Books, 1961), pp. 83-84.
- 16 John Russel, "Salinger's Feat," in *MFS* (Autumn, 1966), pp. 299-311.
- 17 Allan Davison, "Salinger Criticism and 'The Laughing Man,'" p. 8.
- 18 J. D. Salinger, "Teddy," in *Nine Stories*, p. 189.
- 19 "Teddy," p. 181.

- 20 "Teddy," p. 181.
21 "Teddy," p. 186.
22 "Teddy," p. 178.
23 "Teddy," p. 193.
24 Dan Wakefield, "Salinger and the Search for Love," in *Salinger*, ed. Henry Anatole Grunwald, p. 185.
25 James Miller Jr., *J. D. Salinger* (Minneapolis: University of Minnesota, 1965), p. 26.

On Three Miraculous Characters
in
Nine Stories

Reiko Nitta

There are three characters in J. D. Salinger's *Nine Stories* more marvelous than any of the premature or even more sophisticated characters in his other works. They are Seymour Glass in "A Perfect Day for Bananafish," the Laughing Man, the hero of John Gedsudski's story in "The Laughing Man," and Teddy in the short story of that name. Their distinction is marked by a talent to see more than other human beings are allowed and by their choice of death. This thesis discusses the connection between their miraculous talent and their death, taking into consideration their relationship to society and to the people around them.

In "A Perfect Day for Bananafish," Seymour's wife and mother-in-law are depicted in a critical and harsh tone, while Seymour himself reserves his critical comments against them. His story of bananafish, which gives the story its title, shows that Seymour is abnormal and that he is to blame for his own death. The inconsistency between the characterization and the thematic meaning of bananafish, however, is not observed in "The Laughing Man." The narrator of the story can see things both from the ideal side, represented by the Laughing Man, and from the realistic one, represented by Mary Hudson. The narrator can sympathize with the both sides and realizes the conflict between them by perceiving John Gedsudski's inability to stay as the Comanche's leader. "Teddy" tries to solve the conflict faced by the narrator of "The Laughing Man" from the transcendental view, Teddy ignores, however, all human feelings, which we cannot neglect. What is worse, we can never completely believe, like Teddy, in the world beyond death. And, if we could, it is in this present world that we are living and need solutions. In the end, "Teddy" only indicates the direction in which to seek for a solution.

As Salinger observes, these three miraculous characters cannot keep up with the society, and so he lets them die to show that even our full commitment to them will not solve the

problems of this world. Still, by making Seymour's and the Laughing Man's deaths sad, Salinger also intimates that we cannot live a full life without following their life styles. These conflicting attitudes coexist more and more explicitly in Salinger's later works, along with his aversion to American middle class materialism and his admiration to their energy to survive. As a result, what Salinger offers to his readers is a most difficult and sad way of life, much like the narrator of "The Laughing Man." But it is at least an honest and sincere way of living, and many of his young readers seem to sympathize more with this awkward way of living rather than some other clever or bold way, which is after all only a superficial and compromising solution to their predicaments.